

平成16年度 白老宏友会事業運営方針

白老宏友会常務理事 金田 崇

はじめに

昨年は福祉制度の改正により「利用契約制度」が導入され、支援費支給方式の実施に当たって施設側と保護者間に混乱もなく一年が経過しております。

今年度は当法人白老宏友会、白老愛泉園の開設20周年を迎えている。

これまでに福祉制度の大きな改革の中、当法人の歩みを顧みる時、「創設期」当時の利用者の対応としては、施設生活が主流であり、「地域で普通の生活」を希望する人にとって、現実には遠い存在であった。

しかし、福祉施設の改革と共に時代の変遷もあり、地域生活可能な人には「施設生活から地域生活」への移行の推進、自己実現を目指してきた。

地域で生活するための条件整備としては、「生活の場と働く場」であり、新たな支援体制の実現として「グループホーム」の開設(現在6ヵ所)また、福祉的就労の場として「ななかまど」地域共同作業所の開設であった。「職・住分離」の設置に伴い、地域と入所施設(白老愛泉園)を結ぶ架け橋となり、その上、地域福祉運営の基礎固めとして十分その役割を果たすものとなった。

その後地域で一貫した支援体制を確立するために、「ななかまど地域共同作業所」を「分場」に切替え、運営の安定化を図ってきた。当法人関係の地域福祉施設運営全般を統括する、通所授産施設「ポプリ」は、開設以来「地域福祉資源」の活用と共に強力なマンパワー(人材資源)を含む職員、利用者のたゆまざる努力で生産性、収益性の実績を重ねた結果、当初の目的であった事業運営に関する必要な施設設備(ハード面)及び地域の支援体制が概ね達成されたと思っております。

新年度の「転換期」に当って

20周年の節目を契機にこれまで行ってきた施設運営、利用者支援に関する集大成としては創設当初に掲げた「理念」「目標」等を改めて見直しを行い、新たなスタートにしなければならない。

1 リバイバルプランの見直しと再構築

① 三者一対の運営(利用者、職員、保護者)

その後「地域と一対・行政と一対」五者一対となり、現在の支援体制ができあがる。

② 地域福祉の実現「市街地に利用者の生活の場、働く場を設ける」は当初の目的を達成する。

③ 自然資源の活用「薬草、野菜の有効利用」「薬草の里」造成は目的をほぼ達成。

2 利用者支援と目標について

- ・施設の生活・作業＝「あせらず」「あきらめず」障がいの重い人や高齢者には「ゆとりの生活」
- ・利用者本位の支援＝自己選択・自己実現・自己決定・苦情解決の保障。
- ・生活環境の改善＝個室の保障「ガイドヘルプの利用」(旅行、買い物等の支援)
- ・施設の利用者対応＝「リズムと張りのある生活」これまでの継続と個別支援の実施

3 選ばれる施設の条件「発想の転換が施設を変える」

- ・施設の「特色」「独自性」更に「主体的運用」個性の創出。
「時期とチャンス、職員のやる気の発想」「チャレンジ精神」「新規事業の展開」
- ・施設のオープン化(情報の公開、地域との交流イベントの参加)
- ・地域住民に対する貢献(施設の機能・専門性を生かしたサービスの提供)
- ・入所施設の利用者に対する住みよい環境の改善。個別のニーズに対応
- ・資格のある職員の育成(社会福祉士、介護福祉士)等。

利用者・父兄・職員 合同研修会 〇〇登別

支援費支給制度に移行して一年が経過しようとしています。障がい者支援にたずさわる職員を対象にした研修の多くは、支援費に關したものに終始した一年であつたように思われます。何かと不安ばかりが先行した中で、当の利用者たちは現実の生活の中で、それま



では変らぬ毎日を送り、特別恩恵を蒙り、また反対に実害を蒙つたという例はなかつたように思われます。しかし、利用料の個人負担額の増額や帰省に伴い支援費の減額など今後も余談を許さない状況にあり、それらを含めて一年間の検証を行うことを目的と

して、平成十六年一月三十一日(土)〜二月一日(日)に利用者、父兄、職員の合同の研修会が行われました。父兄にとつても一番の関心事はやはり、施設利用料に關することや今後年金で生活ができるか(希望する有サービス等を選択しながら)といった切実なものであつたようです。

高いきれいな声とギターのアコースティックなサウンドが部屋一杯に広がる。歌詞のひとつひとつが心に染み入る。邦楽をあまり聴かない私(しかもオジン!!)でさえも「X-Japan」の名だけは知っていたが、その元メンバーのTOSHIさんが1月29日(木)に愛泉園を訪ねてくれました。芸能界での派手な印象が強かつたせいか、この日訪ねてくれたTOSHIさんは、あまりにも普通すぎる印象を受けました。



元X-Japan TOSHIさんが来た!



派手な芸能界の裏側で、必死になつて偽りの自分を創ることの虚しさ、苦しさをおし殺して毎日を送る辛さ、自殺までもが脳裏をよぎるほど追いつめられたギリギリの精神状態の中で、やっと自分の居場所、本当の自分の在り方が見つかり前向きに生きることができるようになつたことなど一般人には、思ひ知ることもないような心情を自ら話し出すTOSHIさんは、確実にテレビの画面の中だけ

生きていたTOSHIさんとは違い、私たちと等身大の一人の人間という印象を受けました。TOSHIさんだけでは、なく、人間は、弱い存在であると思います。自分が思っている本来の自分と周りの人が思う(期待感も含め)自分との間に大きな隔たりがありすぎると期待される自分になろうと思ひ無理を生じ、逆に自分らしく振る舞うことで周囲の視線が気になつてしまふということもあります。さらにそこへ偏見や差別、侮蔑、優越観、嫉みなどさまざまな感情が混ざり込むからもう大変である。人間が社会性を有することで文明や文化を築いてくることのできたのだから、その代償として個人の心の平穩を失ふことになつたのだと思います。

TOSHIさんがその歌と話しを通じて、少しでも心の平穩を取り戻そうと訴えているような気がしました。TOSHIさん、本当にありがとうございました。

(明実)